

開催された展示会に際しては大変協力して頂き無事終了することができました。

(北海道 森 英一)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義一

医務室勤務

雪と氷に閉されたシベリア越冬の長いこと。大自然には冬の眠りがあるのに、捕らわれの人間どもにとり、なんと苦渋に充ちた煉獄の日々であったろう。この間何十人の人が春を待たずに、父母妻子の夢にうなされ死んでいったであろうか。四月の声を聞き氷が溶け始め、見渡す氷原のあちこちに流れる水の音が聞かれ、岸辺には名も知らぬ草の緑が濃くなっていく。

春がきて生活に慣れてきてか、病棟の患者も少なくなってきた。そこで患者病棟を閉鎖し、東側奥の空いた兵舎を医務室と名づけ、重症者は病院に入院させ、十五人ほどの患者が入室するようになった。医務室には衛生准尉と曹長の二人、その下に九州出身の橋口衛生上等兵と三人ほどの勤務

者がおり、渋谷軍医は回診と患者急変のほかは将校室にいることが多い。

渋谷軍医の計らいで病後の間私もここで勤務することになったが、衛生兵でもないので雑用係ということで患者の肌着の洗濯、食事、身の回りの世話が主な仕事であった。

もちろん医務室とは名ばかりで、ソ連側から支給される薬は少なく、あるのは旧日本軍が持ち込んだ注射液が少々と軟膏ぐらいのもので、検温と脈をとる程度で、特別な手当もできないお寒い処遇なのだ。

患者の減少に比例してソ連側の患者の締め出しも厳しくなつて、渋谷軍医の診断に任せずに、抜き打ちに営内の虚弱者を集め、ソ連の医師（女性が多い）のわか診断を始める。化学的検査のあろうはずはなく、一列に並べまず検温。微熱は駄目、高熱者は休養。少々の下痢はむしろ食い過ぎということだ。彼等に全く通用しないのが頭痛、貧血症、神経痛、腰痛などで認めてくれない。

栄養失調者は裸で歩行させたり、いきなり尻の肉をつまんで少しでも肉厚があれば「ニホヤー、ラポーター」早速働けである。

ガリガリに痩せ細り、歩行によるめくひどい者は「オーカー」と呼ばれ軽作業、つまり兵舎内の掃除、便所くみ取り、トラックに乗って糧秣の運搬や仲間の墓掘りなどに従事する仕組みであった。

医務室しかない唯一の娯楽があった。ソ連軍が満州占領の日本軍兵舎から持ち帰ったものであるうか、犬のマークのビクターの手回し蓄音器にレコード十五枚ほど付けて持ち込んでくれた。日本音楽は面白くもないのでくれたものだろう。

蓄音器には星のマークの下に金文字で「陸軍恤兵部^{じゆつべいぶ}」と書かれ、患者にとつて懐かしい天の恵みでもあった。

レコードは軍歌が二、三枚に、古い歌謡曲「婦系図」「嘆きの馬車」「サーカスの歌」「故郷の廃家」など、珍しいものとしては寿々木米若の「佐渡情話」広沢虎造の「唐丸籠破り」の浪曲もあり、

医務室だけで一日二回音楽の流れる日課となった。一番喜ばれたのが「誰か故郷を想わざる」で一同しんみり。そこには涙をこらえてジーツと故郷や家族の思い出にひたる患者の姿があった…。

医務室で困っていたのは、脈をとるとき時計がないことであつた。満州での略奪、入ソ途中空腹のためパンと交換したりで、ほとんど持ち合わせは無かつた。実は私は、今までソ連兵の目を欺くため時計を上衣の襟の裏側に縫い付けていた。シベリアまで持ち込んで隠し持っていたが、患者のために申し出て、以後医務室の柱に麻紐で吊つて利用させていた。

朝晩の点呼にソ連兵の一人が目をつけていて、この時計を手に入れることを前から計画を練っていたのであろう。ある晩十時ごろ警戒兵が外で電線を切つて荒々しく入つてきたが、真つ暗で時計の場所の見当がつかない。あせて「チャースニエツト」と開き直つた。「時計を隠せ」の声があがる。事情がのみ込めた。手早く時計を外し、患者

寝台の間にびったり横になつた。「どろぼう、どろぼう」みんなで闇の中で大声を挙げる。ロスケの泥棒はソ連側の処罰を恐れて、顔を見られないうちに逃げ去り、時計は無事であつた。

ソ連人氣質の明暗

抑留者の多くは今もつてソ連の抑留者に対する処遇について恨みつらみを持っている。抑留者の一〇パーセントを超す彼の地の死亡者六万人、傷病者四万六千人をみれば、シベリア開発スターリン五カ年計画に練り込まれた労働の苛酷さがうなずける。

とはいえそのソ連もまた第二次世界大戦中ヨーロッパで最大二千七百万人の犠牲者を出し、侵攻したドイツ軍に産物の収奪を受けており、大戦の終結した一九四五年には凶作にも見舞われ、俘虜の処遇以前に自国民の食糧対策に悩む惨状にあつた。

民家の周囲をうろついても、口にする野菜屑も発見できなかった。現に鉄道沿線では満州から運

ぶ貨物列車の貨車の節穴から、主婦連中が停車中に大豆など棒でつついて盗み取る姿をよく見たし、炭鉱の中では女性坑員が坑道などでパンや衣料を得るため売春する姿を垣間見た日本人も少なくな

い。
収容所の幹部や経理係のソ連人が捕虜糧秣を横流しして私腹を肥やした例では、我が収容所でも聞いている。

収容所長に待遇改善を訴えると、「ロシア人の生活を見てくれ、諸君と同量の食料しか手に入らないのだ。ノルマを上げてくれ、これが給与改善の最良の方法だ」と苦しい返事に終わるだけである。

ロシア人には二つの顔があるように思えてくる。一つは毎日付き合う将校、政治部員、役人などで、冷淡、端正、傲慢、狡猾、権威主義の印象を受け、これで泣かされた経験を一様に持っている。

もう一つの顔は一般民衆、わけても下級労働者、農民などほど純朴であけっ広げの人が多い。なに

せ一九一七年ロシア革命が起こり、政治の混乱により教育機能が中断され、教育適齢期にあった年代には文盲が多く、この人達ほど人情味の厚い人が多く、安心して付き合えた。

今思い出すと生活に忙しく、アクセク蟻のように働く日本人には学ぶ点が多い。一九八一年七月、シベリア旅行の際にもこの点をうなずく情景を見聞きし、次の諺を聞いた。

「百キロは距離ではない、十時間は時間ではない。八十歳は老婆ではない」と。楽天的でおおらかな国民性は、これで言い尽くされるであろう。

隣のチタ市に作業に出た。チタはザバイカル(バイカル湖の東)州の拠点都市。極東軍の司令部のある軍都でもある。重厚な古い街と言われながら放し飼いの牛の群れが、電車路や車の間をのんびり歩いていた。

休憩時間に市民が集まり話しかける。「どうだ。チタの街は大きいだろう! トウキョウはこんなにたくさん牛がいるか?」真剣な顔である。「いや

あ東京はビルディングがいっぱい（実は当時は焼野原）、街には人と車が溢れ、牛馬など居られる所ではない」と反論すると「ああ、そうか、ハラシヨウ、ハラシヨウ」と返ってくるから単純だ。

「お前達はなぜここで苦勞しているのか。早く逃げ出せばよいのに。なにわけないさ、貨車にもぐり込んで東へ東へと逃げればトウキョウダモイだろうが……」海に出たら逃亡人を乗せる船などないよ」「あれっ、日本との間に海があつたっけか、陸続きでないのか」なんと無知でお人好しであるうか。しかしこの種の問答には腹が立たないものだ。

作業中の日本人の周囲にはロシア人が足を止め集まってくる。まさに落ち切った日本人は、人を見れば「ダイチタバーク」（タバコ下さい）と手を差し出す。服装こそ貧しいが、人のよいロシア人は気前よくルパシカ（綿入れ刺し子の上着）のポケットから自家製の刻みタバコマホルカをつまんで、全部みんなに分けてくれる。大分ごみも混じ

っているのを新聞紙に巻いて、唾で貼って一服となる。

交歓の相手が囚人女性の一団であつたりすると賑やかになる。こんな時に七、八歳の男の子が間に入ってくる。「ヤポンスキー、ロースキーマダムハラシヨウ。ダー」（ロシア女は好きかい）とませた顔でからかう。……狭い家での一家の生活。野蠻な大人達の言葉。子供達もみんな知つていよ」と言わぬばかりで驚くしかない。

労働環境の悪さから、日本人は余計な苦勞と無益な傷害を受けることが恐ろしい。その上言葉が通じないものだから、時々何かが起こる。

炭坑の中の傾斜地ではワイヤーで炭車を引き坑口まで押し上げ、運ぶ途中のカーブなどで炭車がレールから外れ、怪我人や死者が出たり、老朽化したワイヤーが突然切れて逆送となり下敷き事故が起きたり、安全点検は事故の後に始まる始末である。

またトラックで遠方まで作業に出たのに、ここ

での受け入れ連絡がなかったという事で、他の作業現場にタライ回しされたり、現場には人数に見合う作業用具が足りなかったり、全く無いところもあり、労働管理はでたらめ、効率的な労働環境は全く駄目。これで泣かせられたり、あるいは幸いであつたりする日常であつた。

現場ではとにかく「ダワイラポーター」もつと早く働くと監督や警戒兵はノルマ消化に向け怒鳴るだけであつた。

このような非能率と矛盾だらけに見えるのに、彼らは一向に気にしない。上からの命令どおりノルマを忠実に守れば給料がもらえる。社会主義体制がもたらした国民性の悪い面だと断定する人もあるが、果たしてそうか分らない。

抑留中悪い印象を受ける相手はソ連兵士の中に囚人が多かったこともある。ソ連には軽犯罪から累犯を重ね、刑務所代わりの強制労働を受けるいわゆる囚人は、五十万とも百万とも言われ、労働力の少ないシベリアでの無給労働者として開発

に利用するスターリン政策のしたたかさがみえたものである。

また満州で戦つたソ連軍の中には乱暴、略奪の限りを尽くしたのも柄の悪い囚人部隊が多かつたためもある。

しかし終戦時の我が百七師団長阿部孝一中将と停戦協定を結んだクシレナンコ少将は、戦勝将軍としておごることなく階級が上である阿部中将を尊敬し、終始温和な姿で交渉したことに目撃者一同感激したというし、我が師団将兵を救うべく、軽飛行機で搜索し命懸けで我が師団に終戦を伝えたルビコフ少佐のように立派な武人があつたことも特筆されよう。

一般的にロシア人労働者と働く外国人との差別意識はなく、ロシア人同士と変わりない感情で協力しあつて働くことが多い。

また彼らは文学や音楽でも優秀な民族性を持っていたはずだ。ロシア人が五人寄ればハミングが聞かれ、十人になればコーラスとなり、二十人集

まるとギターかバラライカ(ロシア独特の弦楽器)を囲むという風景が見られた。コルホーズ(集団農場)で働く女性達からも、夕方帰宅途中には歩調を合わせた美しいハーモニーの聞こえることもある。

ある日の夕方、作業監督に街で映画を見せるかと誘われた。古倉庫みたいな窓のないオンボロ建物に薄明かりの裸電球があり、土間に杭を打って板を乗せた固定椅子が平行に並び、粗末な厚着姿の老若男女がひしめいて腰をかけていた。

珍しい日本人の入場を好奇心の目で迎えてくれる。「ヤポンスキー、サジース、サジース」(ここに座りなさい)と席を空けてくれる。上映まで手振り身振りの会話が続く。「お前さんの国はどこ?」イワテケンと言っても知るはずもない。「ヤ、トウキョウ。」「オオトウキョウハラシヨウ」とくる。

「ハ。バママイエス、マダムニヤート?……」会話の最後には一様に「近ごろトウキョウダモイの

列車をこの目で見ている。なにすぐダモイできるからな。元気で働きなよ……」慰めの言葉には、ほのぼのとした暖かみを感じる。

映画が始まるが、題名も俳優の名も読めないし、ロシア語も皆目分らないが、映画の筋書きは理解できた。

最初の映画は白黒ながら、あの忌まわしい独ソ戦争のスターリングラード(現ボルゴグラード)の攻防戦の物語であった。彼らにとって祖国の命運をかけ、国民の最後の全力を振り絞った血みどろの戦場こそは、まさに祖国防衛戦争と呼ぶナチス撃退の誇り高いモニュメント(記念塔)でもあった。

モスクワの防衛線にあるスターリングラードは、ナチスドイツの攻撃に破壊の限りを尽くされ、兵士、市民の命を失ったが首都モスクワを守り、祖国は生き還ったのであった。

ストーリーは、先に戦場に夫を送った一人の若い女性が、目前に迫るドイツ軍団を迎え、地下壕

で最後の授乳を終えて、乳呑み児を老父母に託し
防衛戦に身を投じ、やがてドイツ軍敗退の後、荒
野原にさ迷う家族と劇的に邂逅かいごうを迎えるという
物語であつた。

空爆、砲撃の攻防戦の激しさ、防空壕の中には
老人、子供が残り、若者達も家族、恋人と別離の
抱擁をして、働ける男女市民は壕から出て行つた。
郊外では戦車壕を掘り鉄条網を張る者、自ら銃
を取る者。女性の炊き出しと傷病者の看護。それ
はまさに生き地獄であつた。観客の間から鼻水す
すりや嗚咽の聲が聞こえてくる。

次の映画は子供向きの空想アニメーション「桃
太郎の鬼ヶ島」のソ連版というところであろうか。
山奥に住む悪玉の砦に「魔法の空飛ぶじゅうたん」
に乗ったスーパーマンが、「魔法の玉」の威力と知
恵を駆使して妖怪を退治するという子供達を湧か
せる痛快物語で、戦後物資不足の折に子供達に夢
を抱かせるソ連の教育に配意する威力をみる思い
であつた。

シベリア流浪

一 流浪マカヴェイ

チエルノフスカヤで丸一年過ぎた二十一年暮れ
に、ソ連側で編成した名簿によって至急持ち物を
整理して集合せよとの命令があり、私もその中に
あつた。

みんなダモイ説に沸いた。「帰ったら家に健在
を知らせてくれよ：」「俺もすぐ次の引揚船に乗
れるだろうよ。皆帰ったらゆつくり呑みあおうよ
なあ：」鬚面が喜び、肩を叩き合つた。

昼前に出発するはずが、迎へのトラックに乗る
ときは陽が傾いたところで、行き先も告げられない
まま、満員のトラックは雪道をひた走る。途中カ
ダラの墓地前を通過するが、ピューピューと耳元
をかすめる冬の風は、亡き戦友の怨霊であろうか
「俺達を置き去りに、君達だけ国に帰るのかよう
：」と恨みの叫びに聞こえるではないか。みんな
で墓に手を合わせ、許しをこうのであつた。

一時間ほどで大きい市街地が見えるが、チタの

街のようだ。やがて松の疎林の中の兵舎らしい数棟の建物が見えるバラ線の囲いの中に着いた。ここがチタ地区日本人の根拠地、三八一収容所であることを知らされた。ここはダモイの中継地ではなく、作業隊再編成の施設であることを知り、一同愕然^{がくぜん}とする。

天井の高い室内には、荒板の三段敷きに超満員のすし詰め。人口密度が高いので夜中の騒^{いびき}、寢言、扉の開閉のきしみ音などでノイローゼ気味。ゼムリヤンカ（地下兵舎）ではあったが、チエルノフスカヤが懐かしくなるから不思議なものだ。

二、三日経ち収容所の空気も分かつてくる。珍しい墨書きのポスターが貼つてある。近日上映「一本刀士俵入り」、〇月〇日夜第〇兵舎において名画『婦系図』：あれっ、シベリアくんだりで懐かしい日本映画が見られるとは？…とにかくその日を待つことにする。

その日我が兵舎で今晚上映。スクリーンはどこへ張るのかと余計な心配をしていると、夜九時ご

ろいよいよ始まった。

最初アコーディオンかバイオリンかで前奏曲を流したあと、一人の男が前に出た。「ただいまより上映いたします映画は何々映画会社制作、原作者、監督某、脚色演出誰々、配役何々と前口上があって、続いて上映ならぬ「映画説明」ということであつた。

説明から配役一人一人のセリフまで、延々一時間も続く抜群の記憶力と話術のうまさ、普段情報に飢えている一同、夜の更けるのも忘れ映画鑑賞の気分に入り、しんみりと聞き入るのであつた。

弁士は某映画会社に関係あつた島津幸一という人物で、やがて次の収容所から彼と行動を共にすることになる。

ここで約二百人の作業隊が編成され、大方面識のなかつた人達と、チタとチエルノフスカヤの中間に駅を持つ、「マカヴェイ」と呼ぶ部落に送られる。

この駅は無人数で旅客ホームは狭く、広い木

材の積み込みホームと線路下に丸太置場（土場）が広がり、乱雑に積まれた大小の丸太が氷雪に固く凍りついた寒々とした風景に身震いがおこる。

これを見て我らのここでの作業はすぐに呑み込めた。宿舎は駅にほど近い木造古屋。奥に狭い炊事場があった。或いは以前囚人でも住んだ跡であろうか。宿舎は狭いので、早速土場から細い丸太を集め二段の床を作り、松の枝葉を敷いた上に毛布を広げ、寝室兼居間はでき上がる。

仕事はソ連のトラック部隊や囚人の手で遠い山から運び込んだ丸太の貨車への積み込みで、引込線に入る貨車の来る時間は不規則の上、積み込み所要時間が厳しいノルマで、ほとほと泣かされた。貨車は有蓋の十五トン車から無蓋車七十トン級まで雑多で、一列車約二十両ほどで、車両の大きさにより一両に何人と割り当て、二、四時間以内とか、制限時間が設けられた。

凍りついた松丸太は直径十センチから六十センチ、長さも一メートルから五メートルぐらいまで、

不思議なことに鳶口、鶴嘴、ロープはおろか一本の鉄棒もない。すべて体一つでの作業で、まるで手品のようなもの。

細い丸太は肩に担いで有蓋貨車に、無蓋貨車には長い丸太をコロ木を敷いて土場からホームへ、ホームから貨車に細い丸太を斜めに渡し、みんな「ヨイショ、ヨイショ」と転がして載せる。この作業中に肩や手足を怪我する者が出る。腹が減って力が出ないのに、警戒兵が「ダワイ、ダワイラポーター」（早く働け）と怒る。

日本人は頭を使って体力を消耗せず、能率を上げようと議論し合うが、彼らはこれがまた癪しやくに障るらしい。「お前達は理屈ばかり並べて働かない。黙って体で動け、この様にだ」と丸太を軽々と担ぎ上げて見せ、最後はやはり「ビストラ、ダワイラポーター」とくる。

貨車入線は全く不定期で、夕食前や夜中にくることもあり、まるで夜襲の戦闘を迎えるような騒ぎとなる。

ある冷え込む夜、午後の積み込みでヘトヘトに疲れ、暗い電灯の下でわびしい夕食の芋がゆをすすり始めたのは、既に九時ごろであつたろう。今箸を持った瞬間、天はなんと無情であろうか：例の貨車が入った。至急集合せよとの命令が出た。

あまりの悔しさ、情けなさに、お互いに命令を無視して食事を続けることにした。わめいていた警戒兵もあきれていた時、長身で大柄な所長が満面に朱を注いだ顔に、肩は怒りに震え現れた。

彼の口から出る言葉は、ロシア語最低の罵言ではないか。怒り狂つた彼は、あたりにペッペッと唾を吐きながら、やにわに皮長靴で日本人の夕食中の飯盒を片っ端から蹴飛ばし始め、警戒兵もこれにならない、無残や血の一滴に値する少量の夕食は、飢えた胃を満たすことなく一瞬に吹き飛んだわけだ。

ああ何たる非人間的仕打ち、何たる屈辱。しかも教養あるべき高級将校（大尉）の仕業と信ずることができようか。もし我に剣あれば、この男と

刺し違えて死にたいと思つた。素朴で人情味あるロシア民衆を見ているものにとつて、権力を持つ彼ら階層の本質を見た思いで、今も忘れることができない。こんな日常に明け暮れる日々であつた。

二 流浪ダラソン

マカヴェイの駅のそばにいたので、時に日本人の乗った貨車が通過することもあつた。東を指して通れば「ダモイに違いない。もう帰国は目の前に：」とはしやぎ、西に向かう同胞あれば、「もう絶望だ！やはり一生をこの地で果てるのか：」とわめく。二カ月を過ぎてまた移動となつても、もう驚かなくなつた。

いつものようにアメリカ製トラック「ペーカー」に乗り、ここから四十キロほど奥、人家のない山の中に運ばれた。そのころ見渡す山脈にも春の息吹が感じられ、はるか祖国の山河との錯覚さえ起こす。しかし空はやはり鉛色に見え、そこには疲れ果てた我らの住む安住のねぐらは無かつた。

横長の天幕の中に溝を掘り通路とし、その上に

棟木を通し、細い丸太を山型に並べ、屋根板代わりに松の枝葉を覆って、側溝として掘り上げた土を傾斜屋根に乗せた半地下のトンネルである。雨が降れば雨水で毛布がグショグショ、食事中など誰か低い屋根に頭をぶつけると、飯盒のかゆは砂だらけ、口の中がジャリジャリ。室内は電気がないので真つ暗。薪ストーブがあつても暖かくない。便所は周囲の山にご自由にという生活だった。

仕事は周囲の山の至る所に松丸太の集積土場があつて、ソ連トラック部隊が何十台も入り込んで、日本人四人一組で丸太をトラックに積み込む作業であつた。ソ連兵にも一日何回とのノルマがあるので、ここでも「ビストラダワイ」の連続で、体力ある組は四時ごろノルマ消化で帰るのに、遅い組は六時過ぎということになる。

幸いソ連兵はたまに一日の休養日があるので、そんな日は一日自由の日となり、全員山野を散策し、野草のアカザ、カタクリ、アマドコロの根、ほか軟らかい野草は何でも摘んで水煮して、飢え

をしのいでいた。

時には伐採されてある山から山裾の平坦地の土場まで、二メートルの小丸太を担いで運び出し、高さ一・五メートル、横幅三メートルの規格の棚に組んで、そのノルマは一日四人で二棚だったと思う。

初老の監督（カマンデル）は仕事の手順を説明すると、ほかの現場へ出て行つた後で、最初の數日は命令どおりに真面目にノルマを消化し、四時過ぎに監督が検査にきて、完成した棚の所どころの切口に黒い墨をつけた検印を打ち込んでパスし帰ることになる。

このころの我々も、ロシア人を騙す、したたかな知恵を發揮するようになっていた。

何日か経つて悪知恵を覚え、監督のいる間は「よしよ、よしよ」と威勢のよい掛け声で丸太を運び棚木を積み始めるが、監督が去ると検印済の棚を捜し、刻印の丸太を抜き取るか、抜け難いものには削り取ると新しい棚に変わる。

あとは不寝番をたて、みんな眠りこけて休養となる。四時過ぎ監督の姿が見えると、飛び起きて丸太を担いで右往左往し検査を受ける。なるほど検印がないので、今日運んだものに間違いない。ということでは彼は笑顔で「オオ、ハラシヨウラボータ」で検印を打ち込む。悪い気もするが、生きるため仕方がないということながら、なんとなく後味が悪い。

こんな山の中の重労働に明け暮れる毎日であつてみれば、文化活動と称する教育宣伝の時間もなければ、日本人向けの「日本新聞」も届かなかつたし、かの島津幸一君の映画説明もパツタリ途絶え、東京ダモイのニュースを聞かれない隔離生活が四カ月も過ぎ、七月の盛夏を迎えていた。

三 流浪ガルホン

相変わらず丸太相手の作業中の午後、一人の警戒兵（カンボーイ）がジープでうれしい情報をもたらした。「全員トーキョウダモイ。今すぐラーゲルに帰り、身の回りの整理せよ?…」

これまでの移動には噂が多く、ソ連側から帰国と明言されたことがなかっただけに、今度こそは時期到来と小躍りし互いに肩を叩き合った。やがてトラックでチタの三八一収容所に急いだ。

チタラーゲルでは邦人がすぐくあふれ、ダモイ一色に浮き立っていた。しばらくぶりにチェエルノフスカで別れた我が搜索連隊の島津中尉、五十嵐曹長、戦友の面々と再会する。

翌日ソ連の政治部将校が出てきて、沈痛な面持ちでいわく「我がソ同盟は、諸君を一日も早く日本に無事送還することを念願して、極東のナホトカ港を整備し、いつでも日本の引揚船の入港を待っているのに、日本政府は故意に充分に船を回してくれない。ナホトカには現在帰国を待つ人であふれ、諸君をすぐ全員送ることは難しい。しばらく待ってもらおう人もあると思う…」との意味の話を聞かされた。

先着の戦友達は幸運にもすぐナホトカへ向かうらしい。預かっていた隣町千厩町の幹候の戦友菊

地四郎君の遺骨を同郷の佐藤保君に渡し、届けてもらうことにする。(だがナホトカで持ち物検査に会い、取り上げられたという)

明暗の岐路がはつきりし、再び第二チタ駅から貨車に積まれ、ナホトカ方向に背を向けシベリア鉄道を西へ列車は走る。

…運命の羊の群よどこへ行く？緑の草の豊かな桃源郷へか、はたまた地獄の屠場へか？…

暗い貨物列車は、果てしない荒野を軋み揺られてひた走る。

一夜明けた翌朝、ウランウデ市に近い小駅「ガールホン」に下車。駅裏の木造建物に入る。ここは従来と違って開放的で明るい感じで、いやなバラ線もなく、近くに街が見え、通行のロシア人と自由に挨拶も交わせる最適の環境の土地であるので安心した。

近くに製材所があつて製材の貨車積み主だが、配車が少ないので農場の手伝い、発電所の修理や煉瓦積み、雑作業などで従来の重労働からみると

天国であつたし、農場作業などは楽しみさえわいた。

馬鈴薯掘りの作業には夏なのに防寒外套を着込んで、帰りには外套の裏地の縫いつけ糸をほぐくと外套は袋状になる。そこへ馬鈴薯をいっぱい詰め込む。裾回りが厚く重くなって歩くのに大変だが、帰った後に満腹感が味わたる。

今まではばらに別れて生活した連中がまた一緒になつたので、しばらく鳴りをひそめた演芸班がまた活躍を始める。島津幸一君の名調子の映画解説が復活。まず「盤獄の一生」が語られ、時にはいつの間にも用意されたかアコーディオン、ギター、バラライカ、小太鼓などの演奏によるミュージックものの「歌う狸ご殿」のにぎやかなものもあつた。

演芸班では楽道家でオールバックの某准尉さんが班長となつて映画説明の島津幸一君、大阪堺市の古藤実君、埼玉県の辻元利三君、弘前市の佐藤雄一君、他に楽団のメンバーも揃い、ソ連側も鷹

揚に演芸の練習もさせてくれる。そのうち収容所隣のバラック小屋を改造し、急造の劇場も出来上がり、長い白夜の夏の夜を、詰めかけるソ連市民と一緒に歌と演芸を楽しむことができた。

夜ともなると着飾った娘達が舞台の上でソ連兵とタップダンスに興じ、こちらの演芸班が楽器演奏を手伝う日ソ友好の情景も見受けられた。

また新聞班も復活し、富山県出身の相山長一氏を班長に、福井県鯖江市の坂井力雄氏と最年少の私の三人で、壁新聞や回覧用の文芸紙を発行した。他のラーゲルと違って原稿の検閲や規制もなく、他愛のない内容であったと思う。

本名を忘れたが文学好きの人がいて、小説を書いてくれた。ペンネームは時代物では「明見龍太郎」、現代小説では「碧川純夫」と名乗っていた。挿絵は市川市の郡司正男氏で、相当の腕を持っていた。

ソ連側の祝日の日、こちらも休日となり午前演芸会、午後には街での入浴ということで、演芸会

には所長以下ソ連将校、警戒兵も鑑賞する中で出したものの一つに、島津君、佐藤君の漫才が始まった。

最初にソ連でよく歌う「インターナショナル」の歌詞を替えて、抑留者達のひもじい姿、労働のつらさ、食事の悪さを面白おかしく替え歌でやるので、みんなげらげら笑う。

言葉の通じぬ所長以下も満足そうにニコニコ、和気藹々というところ。：突然後ろから鋭い声がかかった。「ストイ、ストイ、その歌止めなさい」

肩を怒らし舞台に登ったのは、後ろで聞いていた、黒髪、黒い瞳、スターリン鬚のグルジョア系の政治部の中尉で、日本語を少し話せることは誰も知らなかった。

「みんな聞いて下さい。私が所長に代わり申しまあす：」つまりインターは労働者の勝利を讃える神聖な労働歌であり、革命当時のソ同盟の国歌でもあった。この崇高な歌をふざけた演劇の

ネタにすると何たる料簡か、資本主義に毒された諸君の意識はまだ目覚めていないのか？…とお叱りの上、情あるうちの所長は日本人の健康や帰国の早まることを案じているのに、諸君は作業をずる休みしたり食事や寝ることだけを考えている。

「皆さんはよくロシア人は馬鹿だ、頭が悪いと言っているが、それなら日本人、頭の悪いロシア人と戦争してなぜ敗けたのですか？よく考えて下さい」言われてみれば返す言葉もない次第であった。

ある日の午後、駅で製材の板材を積み込みしているとき、有蓋貨車が通過するのを見た。車内から漏れる声、まぎれもない同胞の労働歌合唱の弾む歌声が聞こえる。

貨車の外側には「人民の父スターリン大元帥万歳」「世界の解放赤軍に栄光あれ」「ソ同盟万歳」など、よく聞く標語や讃辞のポスターが貼られており、まごうかたなきダモイ列車だ。いよいよ帰国の間近いことをこの目で確かめた。その夜は島津君の映画説明の声も一段と弾み、夜明けまでざ

わめいた。

四 流浪三度チタへ

夏が過ぎると朝夕の風は肌寒く、冬の気配は駆け足でやってくる。九月、サバイカル州の山野は一日増しに紅葉に彩られ、三回目の冬を迎える侘びしさが胸に迫り、東の空を見上げ嘆息する日が多くなった。

ある日収容所長がにこにこ顔で言った。「諸君はいよいよ日本に帰れる日を迎えた。長い間ご苦労さん。元気で帰国し、日本の民主化運動に努力されることを望む」そんな挨拶があつて、駅のホームで列車を待った。

この日は今までの牛馬並の貨車ではない。東に向かうシベリア鉄道の旅客列車にロシア人と初めて一緒に乗ることになった。広軌のレールを走る重厚な客車は片側通路で、片側には五人程度座れる硬い座席で、背もたれ板の上部は満員の際横に倒され、二段に乗れる装置があり、天井の網棚がわりの板棚には、ちゃっかり横になり寝そべって

いる若者もいる。

三度目のチタ三八一収容所に入ってみると、離ればなれの戦友たちと再会したが、このころ引揚船はナホトカに順調に入港しているのか、二日置きぐらいに梯団を組んで出発しているらしい。日中は雑役に使役され、夜には例の映画説明が上演（？）される。

ダモイの出発はやってきた。昭和二十二年十月初め、二段に仕切った有蓋列車に乗って、確かに東を指して発車した。以前と違うのは、もはや逃亡の恐れがないためか、貨車の中の簡易便所も、外からの施錠もない。警戒兵のものしい警備風景もない。時折の停車中に貨車の下に自由にもぐり込んで用便をすればよかった。

空腹感は変わらないが、労役からの解放だけでも気軽であった。車中はごろごろするだけで暇を持って余し、お国自慢の名物を駄弁る日が多い。関東の人は今は焼野原なのに、東京銀座のどこの肉料理が最高とか、洒落た何店のコーヒーが忘れら

れないとか。餅料理の自慢は東北人に多かった。

話だけの味自慢を並べたところで空腹は満たされるはずもなく、最後はじっと眠っているのが賢い策であることを知り、眠りこける車中の日々であった。

ナホトカへの道のりは四千キロと遠く、轟音をあげて邁進するかと思えば、無名の駅に一時間も停車することもある。時には同じ東に向かう異様な列車に出合うこともあった。

その乗客は、まぎれもないロシア人の老若男女混成の家族ぐるみの移動であろう。停車中はロシア音楽は流れているものの、列車の前後から明々と投光器で照らされ、銃を持った兵隊が物々しく監視する。つまり逃亡を警戒しているのだ。同じ駅で並んで停車の際に、彼らと一様に貨車の下で尻を出し合って用便する。妙齢の婦人、少女もいるが、恥らう贅沢な余裕はないので、双方丸見えとなる。

ロシア語を話せる者が声をかけると、彼らはハ

ルピンや北滿に住んだ白系ロシア人で、移民という名目でウラジオ経由でサハリン（旧樺太）に強制移住させられるのだという。かつてロシア革命を逃れ、祖国に背を向けた彼らには、シベリアでの安住の地は無かったのか。それにしても囚人にも劣るこの仕打ちは、どうしたことであろうか。

引揚船を待つナホトカの風景

民主化運動と人民裁判

十月十二日ごろの昼過ぎ、寝返りと窮屈な長途の旅にぐったりしているとき、目的地シベリア最後の地ナホトカに着いたらしい。

駅から海岸の砂浜中央まで引込線があつて、海がすぐそこに見える場所に降り立った。目前に広がる海こそは日本全土を洗った水、祖国に連なる水域なのだ。長く忘れていた潮の匂いを嗅ぎ、両手で砂をさらうと、指の間からさらさらとこぼれる。目頭がじーんと熱くなり、生きてここまでたどりついた実感が重くわいてくる…。

その時海辺めがけ一斉に走る一団があつた。彼

らは水際に打ち寄せられ色ざめた枯れわかめを拾いあげ、両手で掴み食っているではないか。ここには多数の日本人収容所から溝を掘って糞便をストレートに海に流し込んでいるので、湾内には汚物が漂い悪臭を放っていた。「なぜこんな汚いものを食べるんだ。お前達は乞食か？折角ここまできて、日本に帰れずここで赤痢で死んだらどうする。やめろ…」長髪の小ざっぱりした服装で腕章を付けた傲慢そうな顔は、我らとは人種が違うのではないかと思われたが、このラーゲルの指導者達であろうか。しかし餓鬼たちのなりふり構わずに口を動かす姿は、憐れさを越えて悲しくもあつた。

ここでも日本人があふれ、砂浜には無数のテントが張られ、各地で教育を受けた生え抜きの党員や「デモクラートアクティブ」と称する腕章付きの幹部に支配されていた。日課は帰国準備の編成替や勉強会が主で、厚さ七センチもある「ソビエト共産党小史」日本語版が配布され、その講義か、

労働歌の練習であつた。

起床から就寝まで厳しい日課で、さながら昔の軍隊内務班の感がする。肩を怒らす指導者のかけ声に踊るだけで、彼等の意に反すると二言目には「お前達は民主主義（？）に徹しておらん。日本に帰って指導者にはなれん。またシベリアに返して、みっちり根性をたたき込んでやるぞ」この一言が一番怖いもので「はい。はい」が無難である。

船の入港は一日あるいは二日置き不定期らしく、待つまで外の作業に出されることもある。ある日雑役で外に出たので、ナホトカの街の姿を見ることができた。当時のナホトカは住宅僅か五十戸ほど、海岸から続く台地の上に民家が点在し、裏には険しく迫る石灰岩の山がある。わびしい漁村のたたずまいであつた。

引揚げ日本人の乗船地として脚光を浴びた僻地ナホトカは、後の昭和五十六年「岩手県民友好の船」でシベリア旅行で訪ねた際には人口十五万人を超え、高層のアパートが建て込む急成長を遂げ、

近くには極東の通称玄関口、ヴォストーチヌイ港を建設し、日本領事館をはじめ日本商社の進出も多くめざましい発展を見聞きし、今昔の感ひとしおであつた。

さて、作業の帰りに山の中腹にあつて南の祖国に面した日本人墓地に寄り、しばし合掌する。ソ連との戦闘に生き残り、二年余の異国抑留のどん底の苦しみに耐え、母なる国に続く日本海を目のあたりに、この地に無念の思い深く、妻子、父母の名を呼びつつ倒れた朋友の口惜しさを偲び、深く霊に祈る。

三日目ごろ第一分所のすぐ隣の第二分所に移るが、やはりテント生活であつた。ここで抑留中隔離された将校団と合流する。第一分所より更に気合がかかり、神経がピンと張り詰める。分所中央にバラック建ての劇場「闘い」があつて見物席が露天ではあるが、時々上演される教化演劇より迫力のある「人民裁判」通称「吊るし上げ」が見どころのようだ。特に将校団が入ってきたので、

派手に続くようになった。

告発人は召集の元二等兵で、はじめ抜かれたにわか共産党员とか、青春を棒に振った義勇軍の少年、満州から拉致されたインテリ等で、被告人はかつて威張りちらした元将校、憲兵、軍医、満州共和会の役人、中にはシベリアで地位を逆用し、同胞を苦しめた通訳もいたという。

裁判は舞台中央の司会者から指名された被告人がしどろもどろ舞台上に上る。告発人が出てきて被告の罪状を申し立てる。次に証人が罪状の事実について述べる。被告人は必死に反論すると、大衆の中から「嘘を言うな」「その通りだ」などの怒号が入り乱れ、いよいよ裁判は熱を帯びてくる。ここで司会者により延々大衆討議がなされ、派手な野次も飛び交う。

そろそろ被告人に不利な形成となると、被告人の自己懺悔となる。舞台にひざまづいて頭を垂れ、大衆に向かい自己の誤りを認め、今後民衆のため人民と共に闘う誓いの言葉を述べる。司会者は大

衆に被告に対する刑量を諮る。次々出される意見を総合判断して「何某の認めた罪状は極めて重く、奥地に送り返して重労働を課し、我が民衆の同志として立ち直らせることに決定いたしました」拍手が続き一件落着きという筋書きであった。

三日目ほどで最後の第三分所に移る。ここは引揚げ最終編成、床屋、破れのひどい被服の交換等が主な仕事で、食事の内容も少し良くなっている。入ソ以来初めて日本女性を見かける。軍服姿ではあるが坊主刈り頭ではない。看護婦か軍属であろうか、若い女性まで拉致したソ連の仕打ちが理解できない。

いつでも乗船できる待機ということで、作業はもちろん遠出はだめ。休養と身辺整理の静かな日課で、古い汚れた肌着や靴下などを大事に背囊にしまい込む。内地に帰るといいうのに食器代わりの空き缶、すり切れたゴザを丸めて大事そうに背囊にくくりつける者もいた。

分所の中央に人だかりがあるのでのぞいてみる。

あづまや風の建物の中にノートや紙切れを綴じたものがあって、先の引揚者が残した県人名簿というところ。同郷の帰国者を知ることができ、今まで生死の知る由のない義兄の名があった。

いよいよ明日乗船との伝達があったが、党員がスパイしているので言動に注意しないといつ乗船取消しとなるかも知れないとの噂で、いよいよシベリア最後の夜、早々に寝るが、走馬灯のように過去の思い出がよぎり、眠れぬ一夜であった。

引揚船永徳丸

復員式の十月二十一日は爽やかに晴れていた。ソ連側の将校の簡単な挨拶は覚えていない。そのまま残留者と声を交わすこともなく、足取りも軽く、三キロほど先の乗船場に向かうのであった。

ナホトカ港は海面までそそり立つ岩場を削り取って広場とし、引揚船が接岸できる急造の港であった。現在も同胞の手によって拡張中で、岩山の爆破や削岩が続けられていた。帰国の喜びをかみしめるこちらとは対照的に、黙々とトロツコで石

を運ぶ彼等の姿は、一層憐れであった。

待つことしばし、沖合いに小さく見えた夢にまで見る引揚船はようやく静かに巨体を表した。八千トン級の貨物船「永徳丸」は、戦時の輸送船として酷使されたのであってか、ペンキもはげ落ち錆が浮いて、日本の末路を象徴する姿が読みとれた。

”ついに接岸投錨する。鉄のタラップが甲板に連結され、黙々と一段一段踏みしめ、ゆっくり登る。デッキ左右に船員、日赤看護婦が整列し迎えてくれる。「お帰りなさい。長い間ご苦労様でした。船の中でゆっくりとくつろいでください。」引き揚げ者達は一斉にはにかみ、どんな顔で何と応えるべきか迷う風情であった。しばらくぶりに見る日本女性の、何と清楚で美しい姿であるうか。

二千人の将兵は、ついにソビエト連邦の領土と決別した。一人として港を振り返る者はない。小憩の跡にスピーカーから船長の帰国歓迎の挨拶と帰宅までのプログラムについて説明。引き続きテ

キスト配布の上日本国新憲法の講義。見ることに聞くこと新しいことばかり。二年余のブランクを取り戻す今後が思いやられ、浦島太郎の心境となる。

夜半から海路は暴風に見舞われ、老朽船永徳丸はエンジンを停め、波濤に身を寄せ木の葉のように西方に流された。船艙内は激しいローリングに人は転げ回り、甲板の隙間から時折海水が、ざぶりと落ちてくる。

さて暴風は海上ばかりか、船内も荒れ狂ってきた。同船の将校団はナホトカでの反動将校の槍玉に挙げられ、いじめ抜かれた腹いせに、日の丸を掲げて氣勢を揚げ始める。「ソ連に媚びて邦人同士で苦しめあい、人民裁判の名をもって同胞を売り渡した奴らを許せない。奴らを玄界灘に投げ降ろせ。張本人はここへ出てこい！」威勢のよい若手将校が意気巻いている。「反動将校黙れ!!」暗闇の中で野次るものもある。あわや乱闘寸前に見守っていた船員が中に入りなだめ納まった。

そんなにぎやかな風景も、暴風の船酔いに悩ま

され立ち消えとなり、二十四日夜半風静かな舞鶴沖に永徳丸は姿を現し、最後の夜の停泊となった。

明くる朝甲板から懐かしの祖国の風景に見入った。国破れて山河ありシベリア“の塵を洗いきるよう、しとしとと雨が降っていた。山や谷を覆う緑の木々はしつとりとぬれ、段々の山の中腹には黄金色の田んぼに重い稲穂が垂れている。

なんと祖国の美しいことか、島国日本のすべての風景は、人の手で作られた箱庭であるとさえ感じられる。傘をさし学校へ急ぐ子供達が見える。ああここは日本なんだ。確かに故国にたどり着いた実感が、心の奥から込み上げてくる。

国敗れて山河ありき

引揚船「永徳丸」から艇に乗り換え、雨の止んだ舞鶴棧橋に向かいながら目をつぶり、過ぎし足取りを瞑想する。

：日本の最後の断末魔のあがきに似た、あの二十年二月、世間知らずの十九歳のこの身が軍隊に徴集され、敵の機雷に怯えながら釜山に上陸。満

州北西部ハルピン、チチハルで初年兵教育を受けた後、西部国境最果ての興安嶺陣地での土方稼業、ソ連軍の侵攻を受けて凄絶な死闘と続いた。

戦後の師団関係の資料によれば、開戦時一万三千百六十人の百七師団の帰国者は八千十八人、五千百四十二人は大興安嶺を朱に染め、或いは広野に野垂れ死によつて乾いた辺土の土と化し、そしてシベリアはザバイカルの凍土の骸に果てたのであった。

生き残った者にとつてもその後の抑留生活は、死者に勝る苦難の日々であった。飢餓、苦役、悪疫、栄養失調、最後に妻子や母を呼びつつ無念の息を引き取った戦友達の死に顔。生き残った者の悲劇の幕は、これで下りるものであろうか？…
いよいよ舞鶴埠頭に降り立った。引揚者達は一様に無言で、一步一步故国の土を踏みしめ、生きている実感を味わう様子であった。この舞鶴は、かつて軍都の栄光を担った海兵団跡で、旧兵舎は引揚者の帰国受け入れ施設に改造利用されていた。

婦人会、引揚援護学生同盟、復員局の職員が手馴れた動作で歓迎し誘導してくれる。栈橋から上った高台に数人の中年婦人が待っていて、厚紙に書かれた満州の部隊名、階級、氏名、特徴等が記され、一人一人に差し出して見せる。大方は反応ないようで、入港のたびに藁をもすがる思いで我が子の安否をたずねる母親達がいとおしかった。

この中には後日歌謡界でヒットした「岸壁の母」但野いせさんがいた。ついに帰らぬ息子の姿を求め、最後の引揚船まで舞鶴岸壁に立ちつくし、愛息新二君に会えぬまま息を引き取った悲しい物語が生まれたのである。

宿舎の畳の上は、真に心のなごむ場所であったが、まず税関検査だが、持ち物といえばポロの肌着ぐらいのもの、背囊の中から大事に包んだバンドなしの腕時計がでてくる「ほほう、時計を持ち帰った人って珍しいですね！」と税関吏が言ってくれた。

翌日は復員業務と被服などの給付で、海軍用の

襟折りの新しい軍服二着のほか、十六点の衣類、毛布、日用品が支給され、さらには引揚給付金として初めてお目にかかる百円札。金三百円という大金を頂戴する。(後でインフレで僅かな額であったことを知る。)

忙しい復員手続きの合間にも、各室にあるスピーカーカーによって本部から引つきりなしの呼び出しが煩わしい。「永徳丸で引揚げの〇〇部隊〇〇さん、ご用がありますので本部CIAまでお出で下さい：」何度も繰り返す。これに応じた人から聞くと、シベリアで党活動やアクチブであった人と呼ばひ、日本語を話せる米人又は二世が担当で、ラーゲルの生活、党の教宣活動従事者の氏名、果てはシベリア鉄道沿線の状況、飛行場の位置など、脅しを加えてしつこく調べられたという。アメリカの日本占領政策は相当に根深いことを知らされる。

ある人がもらったばかりの給付金大枚三百円を懐に、最後の夜にうかれ、近くの縄のれんの店に

戦友連れ立ってサヨナラパーティーよろしく合成酒(当時清酒はなかった)とモツを注文し、何年か振りのささやかな酒盛りを楽しむまではよかったが、合計したら一人四百円の勘定となり、もらったばかりの貴重な毛布を売って精算したとばかり、インフレのすごさに身をつまされる。

翌朝。二十二年十月二十八日、引揚列車は一路東京に向かった、舞鶴から京都、東京に至る沿線に見るものは、日本の敗戦の現実を物語る焼野原の光景であった。上野駅の中央ホールに板敷きの三段に改造された復員者用の簡易宿泊所に一泊したが、鬚をのばしよれよれの貧しい服装に虚ろな目付きで、食べ物と一夜の寝ぐらを捜す引揚者の男や女が駅舎周辺をうろついでおり、まさに当時の日本の縮図を見る思いであった。

雑然とする駅周辺を監視するのは、警察官とヘルメットにMP腕章をした米軍兵士で、米兵にぶら下がるようにまわりついているのは、初めて見聞きする日本女性のパンパンガールとか、ただ

唾然としてみるだけであつた。

一閃で乗り換えるとき、最近被害のあつたカザリン台風の爪跡を見たものの、故郷の山河は昔のまままで迎えてくれたことにほっとしたものである。

青春の傷あと深く

軍隊に続く抑留生活から脱出した帰郷なのに、家郷もまた厳しい戦後に見舞われていた。物資の不足、食糧難、生活難、追い打ちのカザリン台風による農地、道路の荒廢など、地域の人々を必死の闘いに追い込んでいた。

我が家においても家業の店舗には売る商品は見えず、僅かの米、酒、食料品の配給所として両親は区内の食をつなぐ小粒のジャガ芋やさつま芋を、朝から晩までたいばかり台秤で目方をかけては行列する人達に渡していた。

既に新憲法下で人々は民主主義と文化活動を声高にぶち揚げるのに反し、戦争の後遺症は根強くまといついて離れなかつた。新聞の報道は戦後の混乱を反映して、生々しく、闇市、進駐軍、パン

パンガール、カストリ等の記事と肩を並べる犯罪の渦。そこには復員兵士の悲しい虚無的な末路があつた。

かつては日の丸の旗を振り、歓呼の聲に送られ、戦場において命がけで戦った勇士の生き残りは、今は目障りな敗残兵で余計者でしかなかつた。連日の新聞記事には、いわく「特攻くずれ」「戦犯人」「復員風の男」「戦争浮浪者」などと呼ばれ、戦後の犯罪を彩る層を形成していた。しかし廢墟の日本もしたたかな復興を始め、工業国として立ち直る原動力も、生き地獄を這い回った凶太い根性の復員兵士の力があつたことは認められるべきであろう。

生活が落ちつき年輪を重ねるごとに、自身の胸の奥底に割り切れない未精算があつた。その第一は満州興安嶺奥深く戦陣に斃たれ、あるいは野垂れ死したものの。祖国に遠く一万キロ、最果てシベリアの凍土に飢えと寒さ、重労働と悪疫にさいなまれ、望郷の夢にうなされ、肉親を呼びながら朽ち

果てて行った戦友たち：いつの日にか平和の中で彼等の遺骨を収集し、家族に引き渡したい。これが生きて還ったものの義務であること。

第二には抑留中のあのソ連の仕打ちと屈辱の青春。つき合うロシア人のすべてが悪い人間ではない。素朴で人好し、民族の差別を持たない心から好きになれた人々も知っている。いつか平等の仲で再び会って、かつてのわだかまりを洗い流したい。これがないと我が戦後はないと思っていた。

前者について遺骨は、戦後一部の墓地で遺族や戦友の手で収集され、東京千鳥ヶ淵霊園に納められているが、我が戦友会においても平成六年七月、戦友十人ほどと共にハルピン、チチハルの兵舎跡を捜し、興安嶺に近い終戦地インドールを訪ね、五十回忌の慰霊祭を執り行った。

後者については、昭和五十六年七月シベリア友好視察団として渡航し、チタ地区に入れなかったものの他の二カ所の墓参をはたすことができたのであった。

帰国後においては二中隊島津精一氏はじめ心ある戦友同志と計らい、満州、シベリアでの苦難の軌跡と、不幸にもあたら青春を荒野に斃れ散った戦友達の鎮魂の譜として後世に残る書籍編さんを計画した。

戦後三十二年を経た昭和五十二年一月、満州編ともいふべき「大興安嶺の彷徨」を、続いてシベリア編の「ザバイカル抑留記」を昭和五十八年十二月に編集し、抑留体験者の生きる証となり得たものであった。

この前者の書籍がNHK盛岡放送の目に止まり、五十四年八月十五日終戦記念日の「話題の広場」に岩手ローカル「満州一七四部隊」として放送が決まり、千葉国夫、千葉義一の二人が出向いて山崎アナと対談出演し、ソ連軍と戦い大興安嶺を踏破した死の行軍を語り放送したのであった。

また昭和三十年より全国的戦友会を岩手県と山形県で交互に開催し、過ぎし苦難の道のりを偲び、帰国後の生活を語り合う交友の場は十八回にも及

んでいる。

昭和二十年八月、旧満州において終戦を迎えてより既に六十一年の歳月を送り、我が戦友達も八十歳から九十歳代までの年輪を積んでおり、毎年何人かの訃報が届くようになった。

天の摂理とは申しながら淋しくも、知る限りの幾人かに戦友会の弔辞を捧げている。

若い時代の戦争、抑留の苦勞を生かし、それぞれ精いっぱい時流に流されずに生き抜いた根性の友に敬意を払うものであり、今後も生ある限り交友の絆を深め、平和の尊さを子孫に言い伝えたいと望むものである。

【執筆者の紹介】

出生地 東磐井郡長坂村

学歴 岩手県立農蚕学校卒業

職歴 県立農事試験場遠野試験地

入隊 昭和二十年二月弘前搜索五十七

隊、ハルピン搜索百七連隊

戦闘 旧満州西部国境五又溝西口

入所 昭和二十年十一月九日

収容所 チェルノフスカヤ、マガヴェー、

チタ、ナホトカ

復員年月日 昭和二十二年十月二十五日（永徳

丸）

復員後の職 東山町厚生課長、総務課長、議会

事務局長、東山町議会議長、老人

クラブ会長

全抑協活動 東磐井郡、一関支部長

現住所 一関市東山町

家族 妻、息子、娘

（岩手県 田辺 壮久）